

序 章

1 本書の視座

(1) 一三世紀の世界と問題の所在

西暦一三世紀は、激動の時代であった。イスラーム世界を統べていたアッバース朝(132/750-656/1258)がモンゴル(Mughal)の侵入によって崩壊し、アッバース朝カリフ(Khalifa)を頂点とする支配体制は大幅な修正を迫られることとなった。すでに一〇世紀以降のアッバース朝解體期には種々の王朝が各地に芽生えており、一三世紀に出現した諸王朝は、そうした前代の支配体制を継承することで繁栄を見せた。そのなかには、本書で取り上げるラースル朝(626/1229-858/1454)をはじめ、マムルーク朝(648/1250-923/1517)やイル・ハーン朝(654/1256-754/1336)ナスル朝(629/1232-897/1492)マリーン朝(614/1217-869/1465)ザイヤーン朝(633/1236-962/1555)ハフス朝(627/1229-982/1574)クルト朝(643/1245-791/1389)テリー・サルタナ朝(603/1206-932/1526)などがある。一三世紀から一五世紀にかけてイスラーム世界は世界帝国の断絶期に入るが、旧アッバース朝支配域においてはその間をつなぐかのように様々な王朝が成立し、二〇〇年を超えて存続するものもなかには見られたのである。そのひと

つである一三世紀末にアナトリアに成立したオスマン君侯国は、イスラーム世界の広域を支配するオスマン朝(698/1299-1341/1922)として、「五〇〇年の平和」を生み出すこととなる¹。

社会学者であるアブールゴドは、一三世紀を注目に値する時代とし、特にその後半には「各地で次々と文化や芸術の成果が花開いた。旧世界のこれほど多くの地域で、文化の成熟が同時期に達成されたことはなかったにちがない」と述べている²。すなわち、ウォーラーズテインが唱える「近代世界システム」³の成立に先立つこと三〇〇年ほど前の世界において、その後の世界が動き出すための基盤が誕生していたのである。貨幣や信用取引の仕組み、資本蓄積やリスク分散のメカニズムが、すでにこの頃にある程度完成し、世界をつなげるネットワークもパクス・モンゴリカにおいて安定・発展を見せる。この時代には旧アッバース朝支配域を中心として様々な産物や人々、情報が東西を往来し、多様な文化・経済システムが存在した。数多くの共存する「中核」勢力が対立を通じて展開する「一三世紀世界システム」が、一三世紀半ばに起動して以降一五世紀末に瓦解するまで二世紀にわたって機能していたと、アブールゴドは考えた。

一三世紀世界システム論に多くの致命的な欠陥が見られることは、清水によって指摘されている⁴。確かに、eastとwestというヨーロッパを中心とした枠組みを無自覚に一三世紀の世界にあてはめている点や、一三世紀に世界システムが存在したことを自明としている点は、批判されてしかるべきである。一方で、中世イスラーム世界について考察するに際しては、一三世紀を世界がつながる画期とみなしたアブールゴドの視座は重要な示唆を与えてくれる。世界帝国であるアッバース朝の滅亡とオスマン朝の誕生の狭間に興った諸王朝が、どのような相互関係の中で成立・展開し、時代をつなげたのかという点を考えるうえで、一三世紀システム論は議論の前提となる枠組みを提示することに成功したと言えるだろう。

一三一―一四世紀に世界大のネットワークが存在したとする構想は、歴史学者である家島によっても示されてい

る。⁵カーティンの「交易離散共同体 (Trade Diaspora, Trading Diaspora)」論をもとにして、陸域を超えたところに形成される歴史的世界である複数の「海域世界」の存在を規定し、それらが互いにつながることで一三—一四世紀に強固な世界大のネットワーク⁷が見られるようになったと家島は考えた。家島の「インド洋海域世界」の概念は、インド洋と地中海を結ぶ大海域世界という枠組みを設定することで水平線上に見えてくるアジア全体史とイスラーム世界史に関する新たな認識を得ることを目指すものであった。家島は、陸域の王権にのみ着目するのではなくネットワークに重きを置き、モザイク的な地域・王朝の寄せ集めの歴史を超えたところで全体史を描き出そうとしたのである。⁶

複数の中核的なサブシステムによって構成される「一三世紀世界システム」や七つの小海域世界の連鎖によって成り立つ「インド洋海域世界」をもとに考えれば、往時の世界がネットワークによって相互につながっていたと理解することができる。しかし、ブローデルの『地中海』⁸をはじめとした同時代の地域同土を比べてその共通構造を探るといこうした比較研究には、通底した問題点が存在する。たとえばヴァレは、チョードリーによるインド洋交易史研究⁹においては、大きな港町や共同体をつなぐネットワークに着目するばかりに、インド洋周縁部に展開した様々な支配権力の状況については触れていないと述べている。

一三世紀を起点とする一三世紀世界システムもインド洋海域世界も、同様の問題から免れない。ネットワークに着目した議論では、様々な結節点の結びつきが往々にして強調される。それぞれの結節点は各地の主要な経済都市によって代表され、その都市を含む地域のなかでどのようにネットワークが展開していたのか、支配権力はどのような状況にあったのかという点は十分に考慮されない傾向がある。往時の世界をより立体的に理解するためには、世界大のネットワークだけでなく地域内ネットワークや当地の王権にも合わせて目を配り、ネットワークと王権とが交錯するところで議論を展開する必要がある。